明治期の唱歌遊戯に関する一考察

―『幼稚園唱歌遊戯法』（1902）の検討を中心に―

戸　江　真　以

（本講座大学院博士課程後期在学）

Singing-dancing in the Meiji Period: Focusing on *Yochien Shokayugiho* (1902)

Mai TOE

Abstract

This study aimed to reexamine the viewpoint of Motokichi Higashi (1872-1956) and to consider characteristics of *Yochien Shokayugiho*. He played an important role in establishing a systematic theory on early childhood education and publishing *Yochien Shoka* (1901). The contents of *Yochien Shokayugiho* were movements which choreographed the dances for 14 songs in *Yochien Shoka*. It is important to consider whether *Yochien Shokayugiho* was published by him or not. Moreover, I compared the singing-dancing works in a magazine, *Fujin-to-kodomo* with those in *Yochien Shokayugiho*, to determine the relationship between kindergarten practices and this book.

As a result, *Yochien Shokayugiho* was evidently not written based on Higashi's views of early childhood education. That book was intended not only for infants but also for school-age children: it covers aspects of education for school-age children. However, the educational content in *Yochien Shokayugiho* is in line with Higashi's beliefs that education should aims to teach children both morality and knowledge. In addition, it is clear that the singing-dancing works of *Yochien Shokayugiho* incorporate considerable rhythmic play; the works in *Fujin-to-kodomo* involve expressive play and include the words of the songs. *Fujin-to-kodomo* clearly placed importance on simulating experiences; *Yochien Shokayugiho* focused on rhythmic ability. Rhythmic play was developed by Goro Tsuchikawa (1871-1947) in the Taisho period, and *Yochien Shokayugiho* played a role in that development.

Ⅰ　研究の背景と目的

唱歌遊戯は，明治期に海外から幼稚園思想が我が国に受容されて以来，重要な保育内容として様々に研究・実践されてきた。明治 9 年（1876）に開園した，我が国初の官立幼稚園である東京女子師範学校附属幼稚園（以下，附属幼稚園）は，唱歌遊戯普及の拠点として大きな役割を果たした。草創期の附属幼稚園では，雅楽の伶人たちによって作られた「保育唱歌」をもとに，実践が行われていた。その作品は，「曲は雅楽調で，古謡といわれるゆっくりした動作」（名須川 2004，p.316）の遊戯であった。明治 20 年代になると，わが国の保育内容に受容，摂取した形で遊戯が取り扱われ，明治 30 年代には，多くの教育者たちによって唱歌遊戯の研究がなされるとともに，「わが国独自の遊戯教材の開発が行われ，それに伴い幼児の興味関心に沿った題材による作品が教師によって創作されていく」（同，pp.317-319）ようになる。

こうしたなか『幼稚園唱歌』（1901）[1] が出版された。『幼稚園唱歌』は，東基吉（1872-1956）[2] の幼児教育論に基づいて編纂された唱歌集であり，幼児により適した旋律やリズム，歌詞が目指され，初の日本人による伴奏付き幼児向け唱歌集としても知られている。『幼稚園唱歌』を扱った主な先行研究に，稲田

（1985），金本（1988），柿岡（2005）がある。稲田（1985）は，東の唱歌教育観が必ずしも独創的なものではないにせよ，実践的行動によってその後の唱歌教育に大きな影響を与えたことを評価している。金本（1988）は，東の唱歌教育観が唱歌作品の歌詞や音楽的特徴に充分に反映されていることを詳細な検討を通して論証している。また，柿岡（1988）は，当時の幼児を対象とする唱歌教育の諸相を明らかにしながら，『幼稚園唱歌』の特質を捉え，幼児に適した唱歌集編纂に取り組んだ東らの姿勢を評価している。このように『幼稚園唱歌』は，当時としては画期的な試みとして捉えられていたと考えられる。

『幼稚園唱歌』の凡例には，「本編収むる所の歌曲は，凡て遊戯に添ひ得べきものなれば，或は適当の動作等を加へて，以て，一層の興味を添ふるをよしとす」と記述されており，この意図を汲んで出版されたのが高橋忠次郎[3]校訂，山田春耕[4]編『幼稚園唱歌遊戯法』である。当該書には，「此唱歌に添ふべき遊戯を作らん事を思ひ立ち按出の後余か（ママ）奉職する處の學校生徒に試みしにまづ歌と動作との間に相當の調和を得たるに似たりよりて前に當校音樂科講師たりし北村季晴氏に其由を語りしに該書の附録として刊行せんこと勸めらる茲に於て勸めに従ひ一と先つ草稿のまゝ出版する事とせり」（山田 序 pp.1-2）と記されている。この『幼稚園唱歌遊戯法』を検討した研究は管見する限り見当たらない。しかし，上記の凡例から，動きが付けられることを想定して『幼稚園唱歌』が出版されていることを考慮すると，東の幼児教育観と『幼稚園唱歌遊戯法』の作品との関連性を検討することは重要な観点であると考える。

東による『幼稚園唱歌』が東の幼児教育論若しくは幼児教育観に沿って作られたことは明らかである。しかし，その付録として出版された『幼稚園唱歌遊戯法』については，東自身が執筆に関わっているのか，東自身の幼児教育観がどの程度反映されているのか否かについては明確ではない。本稿はこれらの点を明らかにすることを研究の中心に据え，当時としては画期的であったとされる東の幼児教育観と『幼稚園唱歌遊戯法』の評価を試みたい。さらに，『幼稚園唱歌遊戯法』と当時の幼児教育の実態との関係を探るために，おそらくは当時広く実践されたと思われる，雑誌『婦人と子ども』に掲載された唱歌遊戯との比較検討を行うことにする。

Ⅱ　東基吉の唱歌遊戯論・談話論

東は，『幼稚園保育法』（1904）で，体系的な幼児教育論を記している。本稿では，この『幼稚園保育法』を中心に，東の教育論を明らかにする。なお，後にも述べるが，『幼稚園唱歌遊戯法』は，遊戯（動き）に加えて，遊戯の目的（一部記載なし）や談話[5]が各々の作品に設定されているため，遊戯論のみならず，談話についても検討する。

東は，「楽器若くは唱歌に伴つて其意味を發表する遊戯」[6]について次のように留意点を述べている。

（い）遊戯の形はなるべく幼兒自然の動作に近からしむること。
（ろ）幼兒をして全心を遊戯に傾注せしむること。
（は）自由活動の餘地を存せしむること。
（に）保育者は監督の位置に立つよりも寧ろ遊戯仲間の一員たるべきこと。
（ほ）幼兒の發達に應じて遊戯の形を變化すること。

東の遊戯論の特徴は，遊戯を「幼稚園保育及設備規程」[7]における「随意遊戯」と「共同遊戯」ではなく，「運動遊戯」と「静止遊戯」に分類していることにある。「幼稚園保育及設備規程」においては，「共同遊戯」を主体とし，「随意遊戯」はそれに付随するものとしているが，「東が分類する遊戯は，自由な活動としての遊戯が主体であり，それ以外の活動は，これらの遊戯から派生すると考えている」（柿岡 2005，p.127）ことが指摘されている。このことを考慮すると，唱歌遊戯も本来子どもの自由な活動から生まれるものとして，東は捉えていたはずである。しかし，唱歌遊戯は，その特性から一定の統制は免れないものであり，保育者らによってある程度動作が指定されなければ遊戯の効果をも果たせなくなってしまう。東（1904）は，唱歌遊戯を行う際の注意点をいくつか呈している[8]が，この点に関して，「自由活動の餘地を存せしむること。」（p.62）に留意すべきであるとしている。「一定の規律はなるべく其範圍を大にして然も之を嚴守せしめ其範圍内に於ては力めて自由に活動せしむべきなり。」（p.63）と述べ，制限を設けなが

らも，その範囲を広くして，あくまでも自由な活動すなわち「随意遊戯」の性質を失わないことを一貫して論じている。

次に，談話論について把握しておく。東（1904）は，談話について，「蓋し幼兒の此世に出るや其思想界甚だ狹小にしてその經驗も亦甚だ僅少なるを以て（中略）幼兒が談話を聞くことを好むは全く此旺盛なる好奇心を滿足せしめ其思想界を擴張し其經驗界を補充せんとする自然の慾望より出るもの」（pp.79-80）と述べており，ここにおいても幼児の自然な活動として談話を位置づけている。談話における留意点[9]は以下である。

（い）談話は全體として玩味せしむべく談話中に含まれたる道徳的意義の一點にのみ集中せしむべからず。
（ろ）談話を授くるに抽象的眞理を概括するを要せざること。
（は）再三同一の談話を反覆すべきこと。
（に）繪畫を多く使用すべきこと。
（ほ）談話の方法に注意すべきこと
　（イ）言語は明瞭にして理解し易く且つ緩急抑揚の變化あるべきこと。
　（ロ）談話は順序正しくすべきこと。
　（ハ）適當なる問答法を用ひ幼兒に想像思考の餘地を與ふべきこと。
　（二）幼兒の經驗に存する事實は必らず幼兒をして自ら語らしめ以て其活動性を滿足せしめ且つ言語の練習に供すべきこと。

東は，談話において幼児の興味を惹くためには，「修身談若くは理科談の形式に陥るべからざるなり。」（1904，p.87）と述べている。東が，就学前と就学後の教育を区別し，幼児主体の教育を目指していたことがわかる。この論において，理論に偏ることなく，幼児の実態をしっかりと見極めていた東の姿勢が見て取れる。

また，東の談話論において特筆すべきは，「児童文学としての談話の教育的価値であり，（中略）道徳心の涵養を『想像の力』の一要素として捉えていた」（柿岡 2005，p.158）ことである。東は，「假設的境遇に身を置かしめ依りて其想像力を養ひ更に同情の念と道義の心とを進めしむる上に於いて功果（ママ）極めて大なりといふべし。」とその効果を認めている。当時は，虚偽を教えることにつながるという理由で，童話等の架空の物語を幼児に与えることに批判もあった。しかし，東は想像力を高めることこそ徳性の涵養につながるとして，自身でも童話を『婦人と子ども』などに掲載していた[10]。東は唱歌と同様，談話の分野においても実践を試みていたのである。

Ⅲ　『幼稚園唱歌遊戯法』の作品分析

『幼稚園唱歌遊戯法』では，歌詞，動作，遊戯の目的（一部記載なし），題材にまつわる訓話が各々の作品に提示されている。

当該書では，『幼稚園唱歌』の 20 曲中 14 曲に遊戯を付けている。あとの 6 曲が扱われなかった理由について，先ず作曲者と作歌者[11]に着目して検討したが，その理由が明らかになるような特徴は，見当たらなかった。14 曲中 13 曲は，滝廉太郎作曲，あとの 1 曲〈風車〉のみが鈴木毅一作曲によるものである。また，14 曲中 12 曲は，滝または東クメによる作歌であるが，〈雀〉は，佐佐木信綱，〈風車〉は，鈴木によるものである。さらに，拍子やリズム，曲の長さに着目して検討したが，遊戯が付けられた 14 曲と比較して大きな違いは見られなかった。したがって，選曲は，作曲者や作歌者，音楽的な特徴によるものではないといえる。

次に，動作，遊戯の目的・訓話について検討する。

（1）動作

動作について，「円になる」，「手つなぎ」，「行進」，「足踏み」，「拍手・手拍子」の動作が，各々の作品に

おいて，採用されているか否かを表 1 に示す。また，「特徴」は，その遊戯の動作において，主要または特異だと思われるものを挙げた。

表 1　遊戯の動作

曲名	円になる	手つなぎ	行進	足踏み	拍手	特徴
ほーほけきょ	○	○	○	×	○	問答形式
ひばりはうたひ	○	○	○	○	○	あてぶり
鯉幟	○	○	○	×	○	両手を頭上に挙げる
海のうへ	○	○	○	○	○	対舞
桃太郎	○	○	×	○	×	行進なし，ものを数える動作
夕立	○	○	○	×	×	オノマトペに対応した動作
かちかち山	○	○	○	×	○	あてぶり
鳩ぽっぽ	○	○	○	×	○	あてぶり，隊形の転換
菊	○	○	○	×	○	数を数える動作
雁	○	○	○	×	○	行進が主
軍ごっこ	○	×	○	○	×	軍隊の動き
雀	○	○	○	○	○	行進，隊形の転換
風車	○	○	○	×	×	回転，着物を活かした動作
さよなら	○	○	○	○	○	行進，足踏み，礼

・手指の細かい動きは，掌を自分の方へ向けて左右の親指を交差して蝶々を表す動作，対象物に指をさす動作，ものや数を数える（親指から順番に折っていく）動作が見られる。
・幼児にとって難しいと思われるスキップや細かいステップなどは見られない。
・全ての作品が集団で行うことを前提として作られている。

上記のように，全体的に大ぶりな動きが見られ，細かい動きであっても幼児の自然な動作を考慮していることが窺える。東の「遊戯の形はなるべく幼兒自然の動作に近からしむること。」（東 1904，p.61）という趣旨に合致しているといえよう。また，遊戯の隊形は，円形を基本としており，子どもが全員の顔を見られるように配慮されている。唱歌遊戯教育の目標とする徳性の涵養，特に協働性を育む意図を汲み取ることができる。

(2) 遊戯の目的・訓話

表 2　遊戯の目的・訓話 [12)]

曲名	遊戯の目的	訓話
ほーほけきょ	審美的感情の養成，性情を和ぐ	春の陽氣に付問答—的に話すべし
ひばりはうたひ	自然を知る，優美の気風の養成	歌中の草につきて種々問答すべし
鯉幟	男子の進取的雄大なる気象	五月節句の由來等を談るべし
海のうへ	児童の活動性を発散，海事思想を養う	陸上の汽車海上の汽船に就き問答を試み次に海産物又は漁師，帆かけ船，風の方向等を問答すべし
桃太郎	尚武的気象	桃太郎の昔咄に付談すべし
夕立	×（記述なし）	雷□□雨等の事に付て咄すべし
かちかち山	善悪共に其報いあることを知る	兎とたぬきの昔咄をなして善悪の區別を覺らしむ

鳩ぽっぽ	愛育せられて末頼もしき人となるべし	鳩に三枝の禮あることと並に軍事にも人間に劣らぬ働をなすこと等を説話すべし
菊	×（記述なし）	菊花の霜に堪へて色様々にうるはしく映く事並に其御紋章なる事等に付き講話す
雁	×（記述なし）	がんの列を正すこと恰も兵士の行列の如く常に教導たるもの先に一羽ありて之を引卒し暫くも其列を亂さざる事等を離咄すべし
軍ごっこ	怯状の思念を除去，軍事思想の亢起	軍隊の規律上の事及び戦地の有様など話すべし
雀	孝悌柔順の美風	圓滿なる家庭を講ずべし
風車	×（記述なし）	風車は南風の時何れの方向に廻るか又鋪凧は北風の時何れの方に揚るべきかなど問答すべし
さよなら	共同的精神，師弟の情	學校は單に學問のみを教授する處でなく多人共に善き遊びをもする觀念を與ふべし

＊網がけ部分は道徳的な目的に関するもの。

遊戯の目的については，道徳的な目的が半数を占めている。次いで，美的感性の育成，諸物の知識，軍事思想の喚起を目的としているものが見られる。訓話の種類については，東の言葉を借りれば「事実談話及寓發事項の談話」[13] が多く見られる。また，道徳的な内容，美的感性の養成を促す内容も盛り込まれている。

ここで注目したいのは，遊戯の目的は抽象的な概念であるのに対し，訓話は子どもにとって身近な話題や興味を惹く物語などが設定されているところである。また，〈風車〉に見られるような理科的な内容の訓話が設定されている事項も含まれている。

Ⅳ　『幼稚園唱歌遊戯法』の特徴

次に，『幼稚園唱歌遊戯法』の特徴を，『幼稚園唱歌』の緒言や凡例，雑誌『婦人と子ども』の実践例との比較を通して検討してみる。

(1)『幼稚園唱歌』との比較

『幼稚園唱歌』と『幼稚園唱歌遊戯法』の緒言や凡例とを比較し，差異があった事項を表 3 に示す。

表 3　『幼稚園唱歌』と『幼稚園唱歌遊戯法』の文言における比較

	『幼稚園唱歌』	『幼稚園唱歌遊戯法』
対象	学齢未満の幼児のために編纂。	尋常小学校及び幼稚園の生徒を対象とする。
談話説話	遊戯を行う前に談話・問答などによって，幼児の興味を惹く。	問答・講話によって，楽曲の意味を充分に理解させ，子どもの興味を惹く。
伴奏の留意点	速度は緩慢にならず，寧ろ急速である方が良い。	曲と動作とを一致させるために，特に礼や回転などの部分は，緩徐に奏する。

上記の表からもわかるように，『幼稚園唱歌』は，徹底して学齢未満の幼児を対象としているのに対し，『幼稚園唱歌遊戯法』においては，学齢期の子どもも対象としている。そのためか，『幼稚園唱歌遊戯法』では，指導の導入段階で楽曲の意味を深く理解することに重点が置かれている。また，『幼稚園唱歌』が快活な音楽の流れを重視している一方で，『幼稚園唱歌遊戯法』は，動きを主体とし，音楽は動きに伴うものとして位置づけられ，あくまでも身体の動きを阻害しない音楽の流れを要求している。動きを主体として

いるところは，体育教育者である高橋ならではの視点であろう。

(2)『婦人と子ども』との比較

『幼稚園唱歌遊戯法』と『婦人と子ども』で取り上げられている同一の唱歌につけられた動作を比較する。下線は，歌詞に沿った動作を示す。なお,『婦人と子ども』に掲載されている動作を考えた人物の記述はない。

表４　〈ひばりはうたひ〉[14] 遊戯動作の比較

歌詞	『幼稚園唱歌遊戯法』	『婦人と子ども』
（用意）	全生徒をして兩手を繋がせて圓陣を作らしめ之を側方に下垂せしむ 奏樂と共に一禮して「ひばりはうたひ」まで樂器にて奏し後共に左の如く行はしむ	この所動作なし
ひばりは	右向けをして兩手を側方に開き肩と水平より少しく高く擧げ再び下し其兩掌を以て輕く外股を打つこと二回 ひばりの舞ひ立つ状をなす	
うたひ	（一同）止り（ママ）速に圓心に向ひて手を下す	
蝶々はおどる	兩臂を屈して上胸部乳の上六七寸を隔てたる位置に取り掌を開き手甲を前に掌を胸に向かはしめて兩拇指を交叉し而して其四指を前後に動かし蝶々が翼を動かす状をなすこと四回	
春の野山に	全生徒兩手を繋ぎ四歩だけ圓心に向ひて前進し又四歩退歩す	
遊ぶはうれし	四回拍手しながら足蹈をなす	
こゝにはよめな	全生徒其位置にて半ば右向けし右足を少しく後に引き腰を屈め折敷のかまひをなし右手にて地の上のよめなをつみ左袖又は左掌に摘み入るゝ状をなすこと一回	右手の人さし指を以てそこによめ菜あるが如く近き所をさす
こゝにはつくし	前とは反對に左手につくしを摘み右袖に入るゝ眞似をなすこと一回	少し遠方を指す
たんぽゝすみれ	（一同）起立す	三つの花が其ほとりにあるが如くに右手の人さし指を以て三度さす此時は右より左へ順次三度さすあり又左より右にするあり又手前脇向とさすありて一定せず
れんげばな	（一同）拍手すること二回	
花をばとりて	兩手を頭上に高く擧げ足尖にて伸び上り兩手を以て花を折り取る如くす	体を屈して地上の花を折り採るようになす右手にてとり左手に受くること四度
草をばつみて	上體を前方に屈し同時に兩手を前方に伸して草をつむ状をなし又正直の位置に復す	花の動作を速かになす

うちのかあさんへ	（一同）足蹈みすること四呼間	直立し兩手の掌を上に向けて揃へ少しつぼめて物を載せる形をなす
おみやにしましょー	兩手を前上方に出し掌を上に上體を少しく前方にかゞめ土産を出す眞似をなす	掌をひろげて手を少し前に押し進む

表 5〈鳩ぽつぽ〉[15] 遊戯動作の比較

歌詞	『幼稚園唱歌遊戯法』	『婦人と子ども』
（用意）	全生徒をして圓陣を作らしめ一，二，の番號を附す用意の號令にて各生徒は□掌したるまま兩手を體の兩側方に平伸す 楽器にて「鳩ぽつぽ鳩ぽつぽ」まで奏す　次に又繰り返して生徒と共に始む	先づ衆兒圓を作りて唱歌す數人の幼兒は鳩となりて圓外好む所に在りて飛び回はる
鳩ぽつぽ鳩ぽつぽ	唱歌しつゝ用意の姿勢にありて兩手を上下に動搖すること六回す而して最後の一回は活潑に下垂して外股を打つ	
ぽつぽくと飛んで来い	全體手を重ねて右へ圓形線上を進行し終わりに停止して内方に面す	鳩は飛び來りて圓の中に入る
お寺の屋根から下りて来い	全體前進して圓を縮小し終りに皆停止して手を放つ	
豆をやるからみなたべよ	「豆を」にて左手を屈して髖骨上に當て其掌を上にして豆を持ちたる形をなす同時に右手を左手の上に運び行きて左手の豆を取る眞似をなす 「やるから」にて右手を體前に右斜に出して掌を下に向け豆を□ぐる眞似をなす 「みなたべよ」にて左手を下にし右手を上にして三回だけ體前に於て拍手す	衆兒は一様に豆を投げやる形をなす，鳩は圓中に在りて兩手にて口を造りて豆を食ふ状をなす
たべてもすぐにかへらずに	奇數生偶數生互に對向して兩手を取り左一回轉を爲す	「食べても直に歸らずに」以下を歌ふ時に至りて鳩は圓中に飛行し，唱歌の終はると共に鳩は周圍の幼兒に止り，さらに遊嬉を始むる
ぽつぽくと鳴いて遊べ	奇遇生徒の圓内に向へる方の手を放ちて一列の圓陣に復し手を連ねたるまゝ八呼間退歩して舊円形に復す	

＊網がけ部分は，律動的な動作と考えられる箇所

『幼稚園唱歌遊戯法』と『婦人と子ども』に掲載されている動作を比較してみると，『幼稚園唱歌遊戯法』の方が，動作が細かく指定されていることが一目瞭然である。また，拍手をしたり，歩行や足踏みをした

りする律動的な動作が見られ,歌詞の意味を表していないところが随所にみられる。一方,『婦人と子ども』では，全て歌詞の意味に即した動作で構成されている。

Ⅴ　総括

『幼稚園唱歌遊戯法』を検討した結果,『幼稚園唱歌』を発案した東の教育観との一致点と相違点が明らかになった。一致点として，①幼児の自然な動きが考慮された，複雑でない動作が採用されていること，②明確な教育的意図のもとに遊戯を位置づけていることがあげられる。相違点は，①幼児のみならず学齢期の子どもも対象としていること，②楽曲の意味を理解させるために問答が設定されていること，③動きに合わせた伴奏を要求していることがあげられる。『幼稚園唱歌遊戯法』は,「幼児向け」を徹底していないことから，東のもとで作成されたとは現時点では考え難い [16)]。しかし，作成に関わった高橋と山田は,幼児教育そのものに精通していたとは言えないが，その著書を概観してもわかるように，遊戯教育に関しては造詣が深い人物である。したがって，東の影響を受けなくとも，幼児の身体の動きを把握した動作を考案できたと考えられる。

また，東が幼児教育において中核に据えている，幼児の自由な活動に関して,『幼稚園唱歌遊戯法』の作品中に見いだすことは難しい。ただ，指定された遊戯に固執することなく，子どもの実態に応じて臨機応変に対処することが，保育者や教師に委ねられている。当該書（東 1902）の序説で「一と先つ草稿のまゝ出版する事とせり大方諸君余が考按の粗雑なるを咎むるなく短を補ひ長をとり…」(序 p.2) と断っており，凡例では「本編中の遊戯を施行せられたる諸賢にして是より猶興味多からんと信ずる方法を按出せられしときは適宜に變更せらるるは編者が希望する處」（凡例 p.1）と述べられている。実践において自由活動を取り入れるには,①子どもの提案した動きを取り入れること,②作品中に自由に動く箇所を設定すること，などが考えられるであろう。

次に,『幼稚園唱歌遊戯法』と雑誌『婦人と子ども』における，同一の唱歌につけられた異なる動作を比較した結果,『幼稚園唱歌遊戯法』では，歌詞の意味に沿っていない律動的な動作が多く見られた一方で,『婦人と子ども』では，全て歌詞に沿った動作が付けられていた。したがって『婦人と子ども』では，遊戯を通じて，唱歌の世界における疑似体験に目標が置かれ,『幼稚園唱歌遊戯法』では，音楽のリズムを身体で感じ取る能力の育成に目標が置かれているといえる。『幼稚園唱歌遊戯法』に見られるような律動的な遊戯は，土川五郎によって大正期に大きく発展する [17)] ことになるが，当該書はその兆しの一端として捉えることが可能である。

註

1）共益商社（東くめ・滝廉太郎・鈴木毅一・巌谷小波）編（1901）『幼稚園唱歌』共益商社
その他に『幼稚園唱歌』と名を冠するものに，A.L.ハウ撰　1892（続編が 1896 年に出版されている。）がある。

2）東基吉（1872-1958）1900 年東京女子師範学校助教授，初代幼稚園批評掛に奉職した。主な著書に『幼稚園保育法』(1904),『保育法教科書』(1910)，1901 年には，雑誌『婦人と子ども』(現『幼児の教育』フレーベル会）を創刊した。我が国で幼児教育を体系化した人物として知られている。

3）高橋忠次郎（1870-1910 頃）は遊戯研究家である。東京女高師及び体操学校等に奉職し，明治 35 年「日本遊戯調査会」を設立した。現在の東京女子体育大学の前進である東京体操音楽学校を創立し，わが国遊戯界の権威として知られていた（『新体育学講座　第 54 巻　体育人名辞典』　逍遥書院　1970)。

4）山田春耕は,『幼稚園唱歌遊戯法』出版当初，長野県師範学校に奉職していた。主に手工教育や芸術教育に尽力し，著書に『小學校に於ける手工科の理論及實際』(1903),『尋常高等小學校手工教授細工及教法』(1907）などがある。『勤労教育と作業教授』(1917）においては,「音樂的遊戯的方面の教育」について述べており,「吾人のこゝに要求せんとする教授の力の教授たり，（中略）總活的にして開發的たり趣味的にして甚しく（ママ）要求の藝術教育に合致せる者の生ずべきを期する」(p.123）としている。

5）本稿では「談話」,「説話」,「訓話」は同一の意味を有するものとして扱う。「談話」,「説話」の名称については，倉橋・新庄（1930）pp.219-223，湯川（2001）pp.352-361 を参照されたい。
6）東基吉（1904）『幼稚園保育法』目黒書店　pp.60-64
7）1899 年 6 月 28 日文部省令第 32 号をもって公布された。湯川（2001）は，「1880 年代以降，文部省がその設置を奨励した簡易幼稚園ないし貧民幼稚園を『規程』外の存在として排除し，他方，かつて文部省が批判の対象とした中上流層のための普通幼稚園を『幼稚園』として制度化するものであった。」としている（pp.361-362）。
8）東（1904）pp.61-64
9）東（1904）pp.94-97
10）詳しくは，柿岡（2005）pp.164-176 を参照されたい。
11）遠藤宏（1991）『音楽教育史文献・資料叢書　第五巻　明治音楽史考』大空社　pp.330-332 及び堀内敬三・井上武士編（1958）『日本唱歌集』岩波書店　pp.89-91
12）『幼稚園唱歌遊戯法』（1902）より，遊戯の目的についてはキーワードとなるものを抜き出し，説話についてはそのまま引用した。
13）東（1904）p.86
14）高橋忠次郎校訂・山田春耕編（1902）『幼稚園唱歌遊戯法』共益商社 pp.5-9 及び〔無著名〕（1904）「唱歌と動作（一，雲雀は歌ひ）」『婦人と子ども』第 4 巻第 6 号　フレーベル會　pp.63-64
15）高橋・山田編『幼稚園唱歌遊戯法』pp.31-34 及び〔無著名〕（1903）「幼稚園の遊嬉」『婦人と子ども』第 3 巻第 6 号　フレーベル會　pp.67-68
16）『幼稚園唱歌遊戯法』の出版を勧めた北村季晴（『幼稚園唱歌遊戯法』1902，序）が，東と交流があったのかは，今後の研究課題としたい。
17）水野浩志（1966）「保育者のあゆみ―土川五郎―」『保育』第 21 巻第 5 号　pp.34-42

引用・参考文献

・稲田嶺一郎（1985）「明治期の就学前唱歌教育-5-東基吉と『幼稚園唱歌』」『美作女子大学短期大学部紀要』第 30 号　pp.19-30
・大沼覚子（2011）「大正から昭和初期の保育における音楽活動の理論と実際」東京藝術大学博士論文
・柿岡敬子（2005）『明治後期幼稚園保育の展開過程―東基吉の保育論を中心に―』風間書房
・金本佳世（1986）「幼児音楽教育創始期における『唱歌』及び『唱歌遊戯』についての一考察」『武蔵野音楽』第 18 号，pp.1-12
・金本佳世（1988）「幼児の音楽教材に関する一考察―東基吉の唱歌遊戯論と，滝廉太郎，東クメ編『幼稚園唱歌』を中心として」『武蔵野音楽大学研究紀要』第 20 号　pp.1-16
・倉橋惣三，新庄よしこ（1930）『日本幼稚園史』東洋図書（復刻版　臨川書店　1980）
・名須川知子（2004）『唱歌遊戯作品における身体表現の変遷』風間書房
・湯川嘉津美（2001）『日本幼稚園成立史の研究』風間書房

第一次史料

・共益商社編（1901）『幼稚園唱歌』共益商社
・東基吉（1904）『幼稚園保育法』目黒書店
・高橋忠次郎校訂・山田春耕編（1902）『幼稚園唱歌遊戯法』共益商社
・〔無著名〕「唱歌と動作（一，雲雀は歌ひ）」（1904）『婦人と子ども』第 4 巻第 6 号　フレーベル會　pp.63-64
・〔無著名〕「幼稚園の遊嬉（七，鳩ぽつぽ）」（1903）『婦人と子ども』第 3 巻第 6 号　フレーベル會　pp.67-68